

校長室だより  
NO. 46  
令和2年1月21日

# すべては光る

梅園小学校長  
たか すりょうへい  
高須 亮平

「どう生きるか」と悩むことは、正しい道に向かおうとしている

3学期が始まり3週目となりました。先週は14日（火）に「梅っ子なかよし集会」や17日（金）・18日（土）には書き初め展・梅園展、授業参観を開催しました。特に土曜日には多くの保護者の方々に子どもたちの姿を参観いただきました。その中では、恒例となってきました「百梅かるた取り」も楽しく行われていました。ご協力に感謝いたします。



授業参観のかるた大会(1年)

今回は、「梅っ子なかよし集会」に関わって、人の悩みについて考えます。悩みは、子どもも大人も多かれ少なかれ、質は違いますが感じているものです。日なたを歩けば必ず影がつくように、生きてると悩みはつきものです。強い光を受ければ受けるほど影がくっきりできるのは、影を悩みとみれば、何か皮肉のような気もします。

悩みには、よく2種類あると言われます。これは誰もが悩みながら感じていることでしょうか。1つ目は、例えば「なんでこんな家に生まれてきたのだろう」「なんであの人はあのようにできるのか」というような、自分では解決できない悩みです。これをよく「マイナスの悩み」と言われます。2つ目は、「このときどうしたらよいだろうか」「自分にできることはないだろうか」というような、自分で解決できそうな悩みです。言わば「プラスの悩み」です。

頭脳の「脳」の字や苦悩の「悩」の字のつくり（右側の部分）は、元々は「腦みそ」を表す古代文字が変形したものであるということです。それに「月（にくづき）」がつくと「腦」になり、心を意味する部首「忄（りっしんべん）」がつくと「悩み」となります。つまり、悩みとは人間の脳と心が協同で作用するもののように考えられます。だから、どうせ悩むならば「プラスの悩み」にしたいものです。でも、真剣になって悩むときは、悩みの質を選択するなどという余地はなく、そんなことは言ってもらえませんが……。



「君たちはどう生きるか」

さて、悩みというと、なぜか私は左の『君たちはどう生きるか』を思い起こします。この本は、元々は戦前に出版された吉野源三郎氏の児童文学でしたが、それを漫画家の羽賀翔一氏が80年後の現代に復活させました。何と200万部の大ベストセラーになり、この2年間で日本人に一番読まれた本とされています。その理由は実際に読んでみると、すぐに分かります。この本の中には、科学も哲学も万載で、それらを思春期の苦悩をからませたり、青春のノスタルジーともいふべき思いを感じさせたりしているからです。ただ、悩みと言うよりは、ここでは課題とも言える内容かもしれません。

この本に登場する人物は、主人公の中学1年生のコペル君と彼の友達、そして、コペル君に大きな影響を与える母方の叔父さんです。ここでの悩みとは、まさにプラスの悩みというべきものでしょう。この前半のテーマは、どちらかと言えば「悩み」ではなく「コペル君の大いなる発見」が書かれています。彼は、叔父さんと一緒に銀座のビルの上から街を見下ろしながら、理科で習った分子を思い出して、こう言うのです。



梅園展・絵の解説をする古橋睦典先生  
(第29代校長)

「すべてのものは小さな分子の集合体だと言うけど、人間一人一人もこの社会を構成する小さな分子みたいだ」と。

それを聞いた叔父さんは、「その発想はコペルニクスみたいだ」と言って、彼に「コペル君」というあだ名をつけました。そして、コペル君にこう言ったのです。

「人は自分を中心に考える癖がある。昔の人は自分がいる地球を中心に天体が回っていると思っていた。しかし、コペルニクスは、宇宙を俯瞰的に見ることですべて初めて地球が太陽の周りを回っていることを発見した。自分中心から全体を俯瞰的に見る眼を持つことを『コペルニクスの転回』と言うんだ」と。

その後、コペル君はこんな発見もしました。ある日、「あぶらあげ」というあだ名をつけられ、その貧しさ故にいじめられている浦川君が学校を休みました。コペル君は彼の家プリントを届けに行き、そこで働いている浦川君を見つけたのです。それで、家業の豆腐屋を手伝うために学校を休んだことが分かったのです。油揚げをつくったり接客をしたりしている浦川君を見て、コペル君は「すごい！」と思いました。この話を聞いた叔父さんは、こう言いながらほめました。

「君がすばらしいのは、貧しい家の友達が懸命に生きている姿を見て『浦川君はすごい』と思ったことだ」

「君は普通にご飯が食べられ、普通に学校に通っている。それは普通じゃないんだ。」

『有り難いこと』なんだ。だから、感謝しないといけないよ」と。

後半のテーマは「コペル君の青春の苦悩」、まさに悩みを取り上げています。3人の親友が上級生に殴られている現場に居合わせながらも、彼は見て見ぬふりをしてしまいました。その前日に「僕も一緒に戦う」と豪語していたにもかかわらず……。

友達を裏切ってしまったコペル君は、自分に絶望し、何日も部屋に引きこもるのです。その彼を救ったのも叔父さんで、このような言葉でした。

「君が苦しんでいるのは、君が正しい道に向かおうとしているからだ。人間には自分で自分を決定する力があるんだ」と。

この本は、「どう生きるか」を自らも悩みながら多くの人に問うていますが、その問いには、自分がこれまで「どう生きてきたのか」を振り返ってみることが大切で、それが1つの解決へ向かわせるものになると思いました。悩んでいたとき、自分を支えてくれた多くの人たちの顔を思い出すことはできます。どんなことをしてくれたか、それを自分はどうか受け止め行動に移してきたか、などなど。コペル君が言うように、たくさんの小さな分子が物質をつくっているように、私たちの人生もきっとたくさんの人の「誰かのために」という心の集合体としてつくられていると思われれます。